第2章　島根県石見地方におけるニホンイノシシの環境選択

2-1 序

食肉資源として高い商品価値を持つイノシシは，狩猟対象としての人気が高く，効率的な狩猟技術が開発されてきた（神崎・大束-伊藤，1997）．その結果，高い狩猟圧がかかるようになり，地域的には個体群の衰退も見られている（神崎・大束-伊藤，1997；大束-伊藤・神崎，1998）が，関東，中国，北九州地方などでは分布域の拡大が報告されている（佐賀県猟友会，1990；日本野生生物研究センター，1991；大束-伊藤・神崎，1998）．イノシシの分布域拡大はヨーロッパ各地でも見られ，その原因として，耕作地の減少など人間の土地利用の変化，イノシシ個体群の再導入，給餌，捕食者の欠如と狩猟規制，地球温暖化による積雪量の減少などが指摘されている（Erkinaro et al.，1982；Saez-Royuela & Telleria，1986；Debernardi et al.，1995；Nores et al.，1995；Peracino & Bassano，1995）．

島根県のイノシシ分布域は明治・大正期まで県西部の山地に限られていた（高橋，1980）が，1970年代以降に拡大し，1975～1985年頃には島根半島を除く県全域に広がった（島根県農林水産部森林整備課，1997）．高橋（1980）は，放牧地や山林の利用集約度低下による下草等の繁茂が

食物やカバーの利用可能量を増加させ，中国地方のイノシシの分布域拡大が発生したと指摘した．しかし，本種の環境選択や生息地利用に関する研究はほとんど行われていないため，その原因については推測の域を出ていない．

そこで本研究は，ラジオテレメトリー法及び痕跡調査によりイノシシの環境選択を明らかにすることを目的とした．そして，島根県における本種の分布域拡大の要因について検討した．

2-2 調査地域

調査は島根県西部に位置する浜田市及び金城町，弥栄村（計43,220 ha）で行なった(図1)．調査地域の標高は0～1,069mで，標高300m以下の地域では海岸線に沿って小規模の沖積平野が分布している．また，標高300mを越える地域は隆起準平原が発達しており，しばしば急峻な斜面や深い渓谷が見られる（宮脇，1983）．これらの地域は日本海型気候区に属しており，山地を中心に冬季季節風による降雪がある（宮脇，1983）．浜田市の年平均気温は15.5℃，年降水量は1,471mmである．植生は海抜600～700mを境に，高標高地域に分布するブナクラス域と低標高地域のヤブツバキクラス域に分けられるが，ブナクラス域の自然植生であるブナ林はほとんどが伐採され，ミズナラ（*Quercus crispula*）・カシワ（*Q. dentata*）林，スギ（*Cryptomeria japonica*）・ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa*）植林が広がっている（宮脇，1983）．ヤブツバキクラス域の自然植生は照葉樹林であるが，1950年代後半までの薪炭林利用により二次林のコナラ群落が形成されている．また，薪炭需要の低下と共に伐採されなくなった結果，林令40～50年の林が44.5%と最も広い面積を占めるようになっている（島根県森林整備課、私信）．コナラ群落では高木層にコナラ（*Q. serrata*），アベマキ（*Q. variabilis*）が優占し，亜高木層にリョウブ（*Clethra barbinervis*），エゴノキ（*Styrax japonica*），ウリハダカエデ（*Acer rufinerve*）等が，低木層に

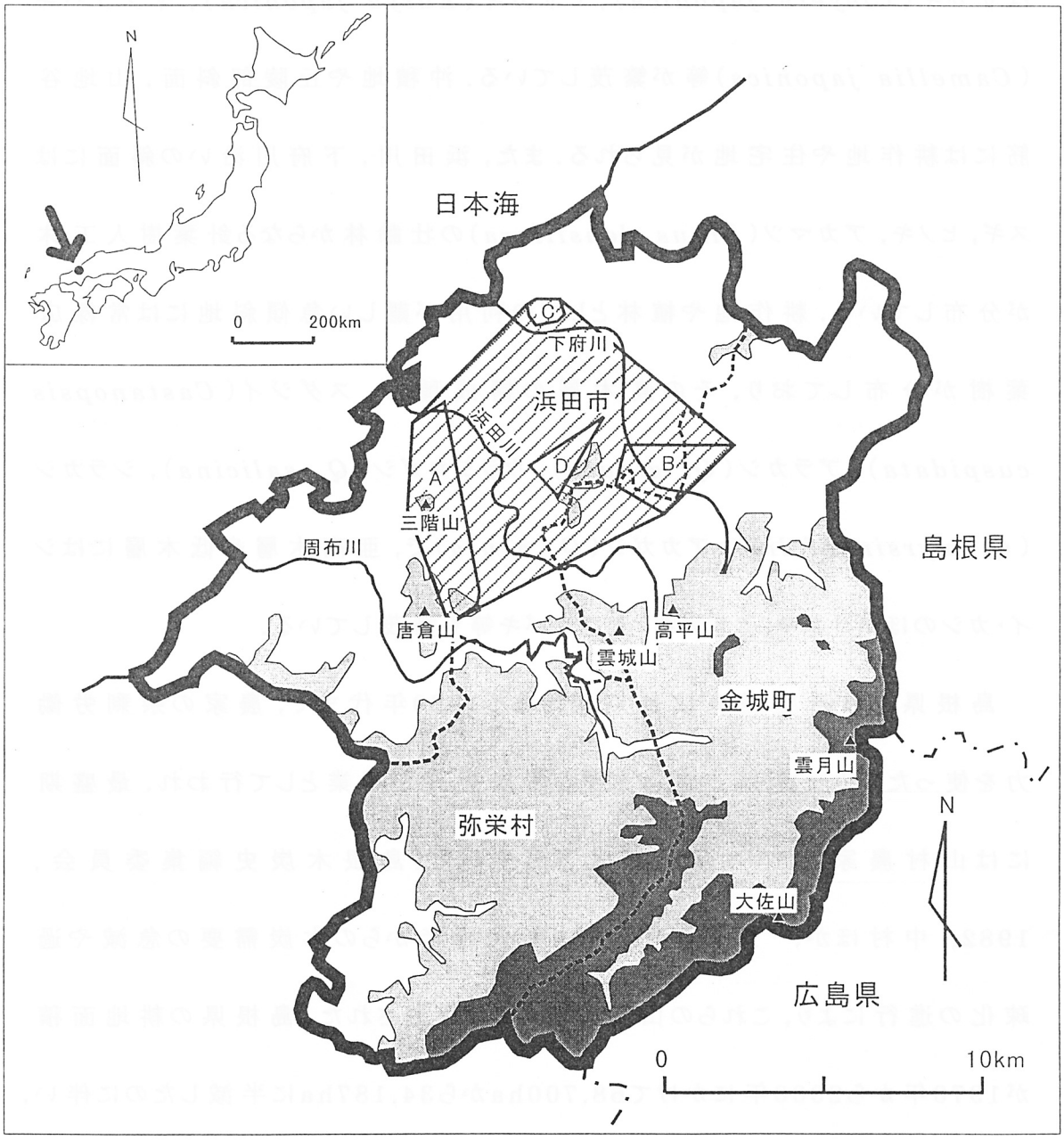

図1. 調査地域(太線内).白色部は標高0～300mの地域，薄い着色部は標高300～600mの地域，濃い着色部は標高600m以上の地域を，斜線はラジオテレメトリー調査において各環境区分の面積割合を求めた地域を示す．また，破線は市町村界，斜線内の実線に囲まれた地域はラジオテレメトリー調査による追跡個体（A～D）の行動範囲を示している．

はサカキ(*Cleyera japonica*)，ヒサカキ(*Eurya japonica*)，ヤブツバキ(*Camellia japonica*)等が繁茂している．沖積地や丘陵部斜面，山地谷筋には耕作地や住宅地が見られる．また，浜田川，下府川沿いの斜面にはスギ，ヒノキ，アカマツ(*Pinus densiflora*)の壮齢林からなる針葉樹人工林が分布している．耕作地や植林としての利用が難しい急傾斜地には常緑広葉樹が分布しており，その高木層の構成種は，スダジイ(*Castanopsis cuspidata*)，アラカシ(*Q. glauca*)，ウラジロガシ(*Q. salicina*)，シラカシ(*Q. myrsinaefolia*)，アカガシ(*Q. acuta*)で，亜高木層や低木層にはシイ・カシのほかサカキ，ヒサカキ，ヤブツバキ等も繁茂している．

島根県では高度経済成長期が始まる1960年代まで，農家の余剰労働力を使ったアカマツ，コナラ，クヌギの薪炭生産が副業として行われ，最盛期には山村農家の50％以上が従事していた(島根木炭史編集委員会，1982; 中村ほか，1995)が，1950年代後半からの木炭需要の急減や過疎化の進行により，これらの山林はそのまま放置された．島根県の耕地面積が1970年から2000年にかけて68,700haから34,187haに半減したのに伴い，調査地域内の耕地面積も3,859haから1,305haへと大きく減少した(中国四国農政局島根統計情報事務所，1995，2001)．放棄耕作地のうち，水捌けが良い水田放棄地や畑放棄地はススキ(*Miscanthus sinensis*)草原となっており，ススキ，ササ，その他のイネ科植物，クズ(*Pueraria thunbergiana*)，ヨモギ(*Artemisia princeps*)，スギナ(*Equisetum*

arvense）などの草本が繁茂している．湿潤な水田放棄地はヨシ（*Phragmites communis*）やその他のイネ科植物，ガマ（*Typha latifolia*），イグサ（*Juncus effusus*）等が優占する湿地になっており，ミゾソバ（*Persicaria senticosa*），セリ（*Oenanthe javanica*），チゴザサ（*Isachne nipponensis*）なども繁茂している．